

今週の為替相場見通し(2018年4月23日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ	
		注	レンジ	終値		
米ドル	(円)		106.89 ~ 107.86	107.64	105.50 ~ 109.00	
ユーロ (1ユーロ=)	(ドル) (円)		1.2250 ~ 1.2414 132.05 ~ 133.09	1.2290 132.30	1.2200 ~ 1.2400 131.50 ~ 133.50	
英ポンド (1英ポンド=)	(ドル) (円)	*	1.3996 ~ 1.4377 150.68 ~ 153.76	1.4007 150.74	1.3800 ~ 1.4150 148.50 ~ 152.00	
豪ドル (1豪ドル=)	(ドル) (円)	*	0.7655 ~ 0.7813 82.43 ~ 83.95	0.7669 82.60	0.7580 ~ 0.7850 81.00 ~ 83.80	

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 橋 雄史

(1)今週の予想レンジ: 105.50 ~ 109.00 円

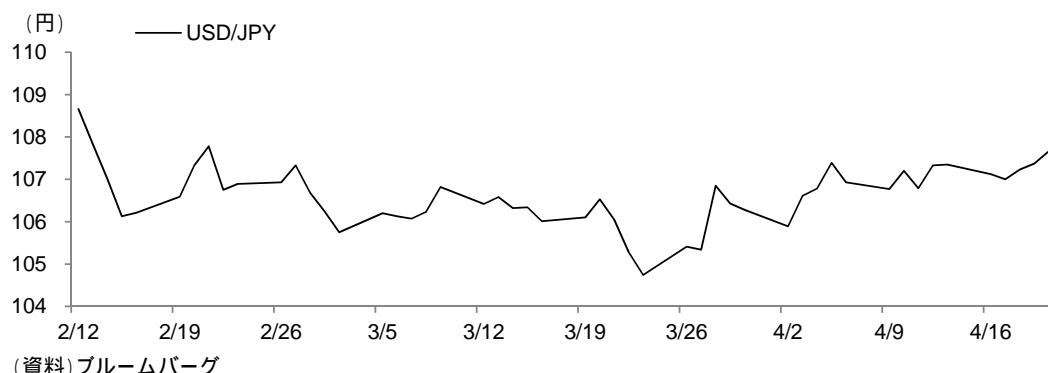
(2)ポイント【先週の回顧と今週と来週の見通し】

先週のドル/円相場はじり高の展開。週初16日に107円台半ばでオープンしたドル/円は、シリア情勢緊迫化への懸念が後退する中で107.61円まで上昇。17日は日米首脳会談における警戒感から一時週安値106.89円をついたが、ムニューシン米財務長官が「トランプ大統領の前日のツイートは通貨切り下げを巡る中国とロシアへの警告でありドルの押し下げを意図したものではない」と発言したことから107円台前半まで反発。18日はWTI原油先物の上昇やトランプ政権がロシアに追加制裁を課す計画はないとの関係者談を受け、107円台前半にてじり高で推移。19日は日米首脳会談が波乱なく終了したことで警戒感が和らぎ、107円台半ばまで上伸した。20日は原油やコモディティ価格の上昇からインフレ圧力の高まりが意識され、米債利回りが2.96%台まで上昇したことでドル/円は週高値107.86円まで上昇し、結局107円台後半で越週した。

今週・来週のドル/円相場は、じり高基調継続も上値重い推移を予想する。先週は日米首脳会談を控える中でトランプ大統領の発言に注目が集まったものの、市場が警戒したほどの悪い結果とならなかったことで、ドル/円の売り圧力は後退した。ただし、G20会合では米国の保護主義政策をめぐり各国からは懸念表明がなされたものの、米国の強行姿勢は崩されず、保護主義政策を巡る懸念は継続している。地政学問題については先週21日には北朝鮮が核実験・ミサイル発射の中止を表明するなど、4月27日の南北首脳会談を前に交渉前の地ならしを進める様子も見られ、米朝首脳会談を前に楽観姿勢が強まる展開も意識されるところであるが、米国株式市場に目を向けると、減税政策に伴い米企業は1~3月期では7年ぶりの増益率を確保するなど好調な決算結果を迎えており、足元の調達金利の上昇や半導体セクターの先行き後退観測から投資家のリスクセンチメントが悪化しており、先行き期待に慎重なムードが漂っている。本邦については想定為替レートが前年対比で円高に設定されることが予想される中、企業業績の先行きにも慎重な見極めが必要となる中、日経平均株価もGWを前に様子見ムードの展開が予想される。経済指標では今週23日(月)に米4月総合PMI(速報値)、米3月中古住宅販売件数、26日(木)に米3月耐久財受注、27日(金)に米第1~3月期GDP(速報値)の発表が予定されている他、来週5月1~2日にかけてFOMC、4日(金)は米4月雇用統計を予定。ドル/円について108円台を前に上値重い推移が継続しているものの、米中の貿易戦争トピックにも一服感が見られており、ドル売りが一服する中で、上値を試す展開となるか。

(3)先週までの相場の推移

先週(4/16~4/20)の値動き: 安値 106.89 円 高値 107.86 円 終値 107.64 円



2. ユーロ

(1)今週の予想レンジ: 1.2200 ~ 1.2400 131.50 ~ 133.50 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週と来週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場はレンジ内で推移した。週初16日のユーロ/ドルは1.23台前半でオープン。週末に米英仏によるシリア攻撃が実施されるも、懸念されていた偶発的な米ロ間での軍事衝突もなく「一度きり」の攻撃とされたことでリスクオフムードが後退。欧洲金利の上昇やトランプ大統領による中ロの通貨安誘導に対する批判ツイートなどを背景にドル売り優勢地合いとなり1.23台後半まで上昇。17日はドル売りの流れが続く中で一時週高値となる1.2414まで上昇するも、独4月ZEW期待指数が2012年11月以来の低水準になったことや、ムニューシン米財務長官が前日のトランプ氏によるツイートはドルの押し下げを意図したものではないと発言したことなどを背景に1.23台前半まで急落。18日はユーロ圏3月消費者物価指数(確報)が速報値から下方修正され、さらに2月分についても下方改定されたことを受けて1.23台半ばから前半まで値を下げるも、一時的な動きに留まりその後は1.23台後半まで値を戻す。19日は目新しい材料感に欠ける中で方向感乏しく1.23台後半から半ばにかけてのレンジ推移。20日は、米10年債利回りが2014年ぶりの高水準となる2.9%台半ばまで上昇する中で全般的にドル買い相場となり、ユーロ/ドルは一時週安値となる1.2250まで下落。その後はやや値を戻すも、ドルの堅調相場が続く中で結局ユーロ/ドルは1.22台後半、ユーロ円は132円台前半で越週する展開となった。

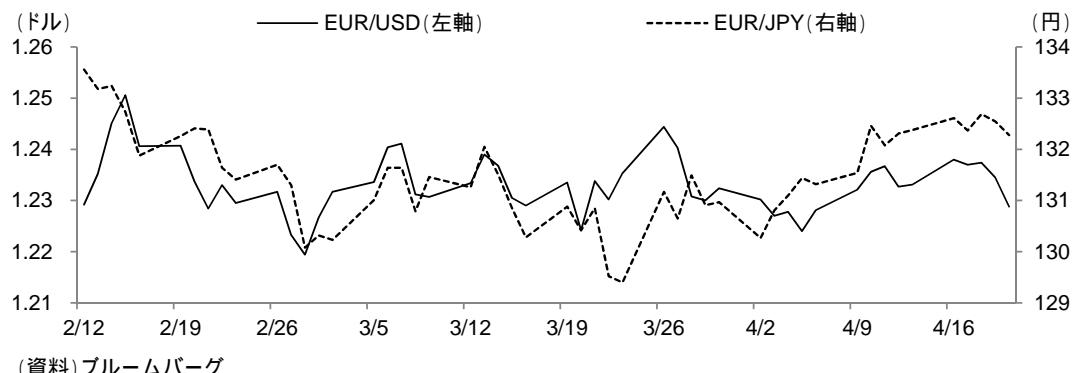
今週から来週にかけてのユーロ相場は、レンジを大きく切り上げる展開は想定しがたいものの、基本的に一定のレンジ内での底堅い展開が続くと予想する。足許のメイントピックとして警戒感が高まっていた米国による一方的な貿易政策による世界貿易戦争懸念や、シリア情勢を巡る米ロ関係の緊張化懸念などは一旦沈静化し、リスクセンチメントは改善している認識。そもそもユーロ相場はECBが着実に出口政策を進める中で昨年から堅調推移を続けており、足許ではやや伸び悩みを見せる中でこうしたトピック感に一時的に振らされる場面もあるが、概ね1.22台から1.24台での安定したレンジ推移を継続する状況に基本的な堅調なユーロ相場という方向感は不变と考えている。今週から来週にかけては、4月26日(木)にECB政策理事会、5月1日(火)~2日(水)に米FOMCと主要金融政策イベントを予定している。ECB政策理事会はガイダンス修正の有無に注目が集まろうが、前回会合にてQEの緩和バイアスが削除されたばかりであり、前回会合分の議事要旨にてインフレ見通しに対する自信を強める一方で貿易摩擦や保護主義に対する警戒感を強めていることを勘案すれば、今回会合でアグレッシブにガイダンス修正を行うことで為替相場が過度に反応する展開は避けたいだろうし、着実に正常化路線を進めている中で特段このタイミングで焦る必要も無いと思われる。FOMCについても前回会合で利上げを実施したばかりの状況下、今回会合は無難通過が基本線。両金融政策イベントの無難通過が予想される中、今週から来週にかけては特段ユーロ相場の方向感を変えるほどのインパクトのある材料はなさそう。強いて挙げるならばイタリア政治を巡る連立政権の行方となろうが、来週にかけて劇的な進展が期待出来るトピックでもなく、頭の片隅に置いておくだけがよいだろう。今週から来週にかけてのユーロ相場は足許の堅調推移が続く中で一定のレンジ内での底堅い展開を予想する。

(3)先週までの相場の推移

先週(4/16~4/20)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2250 高値 1.2414 終値 1.2290

(対円) 安値 132.05 高値 133.09 終値 132.30



欧州資金部 本多 秀俊

3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.3800 ~ 1.4150 148.50 ~ 152.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週と来週の見通し】

先週の英ポンド相場は、横這い先行後、全面安。週明け16日の英世論の関心は、13日夜実施された米英仏連合軍によるシリア空爆。議会の事前承認なしに決行された事実を問題視する声も聞かれたものの、作戦の性質上やむを得なかつたとの理解が一般的で、金融市場に対する影響も限定的だった。17日に発表された英12~2月平均賃金、18日に発表された英3月CPIは、立て続けに市場予想を下回り、英中銀による利上げ観測を後退させることで、ポンドの下押しに寄与した。18日には、本邦大手製薬会社による英製薬会社の買収提案が拒否されたと報じられた。従前から潜在的なポンド(特に対円)押し上げ要因になり得ると観測されていた経緯から、ポンド上値を押さえる要因になるとも考えられたが、この時点での反応は緩慢(買収総額の高騰を予見してか、むしろポンドは堅調に推移した)しかし、欧州時間夕方になって、英中銀カーニー総裁が、「(5月以外にも)金融政策委員会が行われる機会はある」などという形で、5月利上げに対する期待感を牽制。この発言を受けてポンドは急落した。更に、20日付英現地新聞が、「アイルランド/北アイルランド間の物理的国境設置を回避するための英提案がEU側に拒否された」と報じると、ポンドは更に下落。同日発表された英3月小売売上高も市場予想を明確に下回り、ポンドはそのまま安値圏で週の取引を終えた。

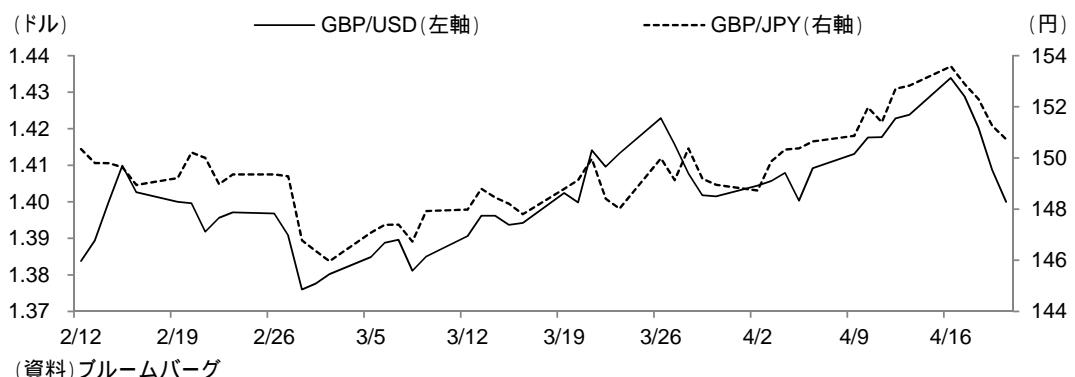
今週・来週の英ポンド相場は、下落を予想。対ドルの直近安値(4月5日の1.3965)、対ユーロの直近安値(3月27日の0.87965)を次々に割り込んで、テクニカルな売りを誘発することで、もう一段水準を切り下げる可能性を警戒する。ポンド安を予想する理由は、まず、4月9日の週に進んだポンド上昇に、今となっては説得力が感じられないから。同局面のポンド上昇には、英中銀5月利上げ観測の高まりと英のEU離脱交渉に関する楽観の2点が主に寄与していたが、いずれの要因も、先週、大きく後退した。ポンドの反応は読み取れなかつたが、上記、北アイルランド/アイルランド国境問題を巡るEU側の拒否に加えて、18日には、英貴族院(上院)で、英政府が推進しているEUとの自由貿易協定策定の方針を覆し、関税同盟に加入する(必ずしも既存のEU関税同盟への残留は意味しない)方針が採択された。メイ首相の指導力は地に落ちた状態にあり、政権の存続に対する不安も高まっている。そうした環境で、英南部で起きた元ロシアスパイ毒殺未遂事件を受けたロシア批難や、13日のシリア空爆などを、「世論の関心を(離脱交渉の行き詰まりから)逸らすために策を弄している」などと読むうがつた見方にも、相応に説得力が増してしまつて。英経済指標などでは、27日(金)の英1~3月期GDP速報値が注目される。市場予想は、前期比横ばいの前年比+1.4%を中心に形成されているようだが、この間発表された製造業/鉱工業生産、小売売上高の直近(3月)指数がいずれも明確に下振れしていたことから、ポンドが天井を打つ反落局面にある現状で、GDPの下振れがポンド売りに勢いをつける展開も警戒される。

(3)先週までの相場の推移

先週(4/16~4/20)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3996 高値 1.4377 終値 1.4007

(対円) 安値 150.68 高値 153.76 終値 150.74



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部シドニー支店 山口 美紀

(1)今週の予想レンジ: 0.7580 ~ 0.7850 81.00 ~ 83.80 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週と来週の見通し】

先週の豪ドル相場は、0.77後半から0.76後半に下落。16日、豪ドルは0.77後半でオープン。前週末14日の米英仏によるシリア政府軍への攻撃は「今回の1度限り」との見方が拡がり、シリア情勢緊迫化への懸念が後退し、豪ドルは0.77後半を中心にもみ合い推移した。17日、豪準備銀行(RBA)が今月3日のRBA理事会の議事要旨を公表。短期的に金融政策を調整する強い根拠は無いとして金利を現行水準で当面維持する方針が示された。また、豪州経済の改善を踏まえ、政策金利の次の動きは引き下げよりも引き上げとなる公算が大きいとの認識で一致した。ただ、目新しい内容はなく、豪ドルは引き続き0.77後半での横ばい推移。18日、需給逼迫懸念の高まりから、WTI原油先物が2014年12月以来の高値まで上昇すると、コモディティー通貨とされる豪ドルも連れ高となり0.78前半まで上昇。19日、注目の豪3月雇用統計では、就業者数が4900人増加と市場予想20000人増加を下回る結果となった。内訳は、フルタイム:19000人減少、パートタイム:24800人増加だった。豪ドルは予想を下回る豪就業者数変化を受けて、一時0.77半ばに下落するも、豪ドル売り一巡後は反発し、週高値0.7813まで上昇。その後、海外市場では、米長期債利回り上昇を背景にドル買いが優勢となり、豪ドルは0.77前半に下落した。20日、米長期債利回り上昇継続から、豪ドルは一時0.7655の安値をつけ、0.76後半で越週した。先週の豪ドル/円は83円半ばから82円半ばに下落。16日、豪ドル/円は83円半ばでオープン。16~18日、豪ドル、ドル/円共に横ばい推移が続き、豪ドル円も83円台を中心にもみ合い推移が続いた。19日、豪ドルが0.78台まで上昇すると、豪ドル/円も83円後半に連れ高となった。しかし、海外市場で、ドル買いから豪ドルが下落すると、豪ドル/円も83円近辺まで急落。更に翌日は豪ドルの大幅下落を受けて、豪ドル/円は82円半ばまで下落して越週した。

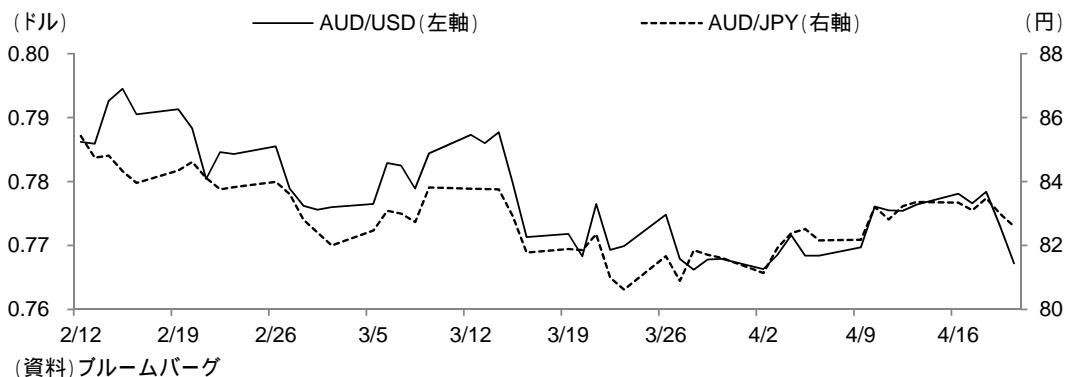
今週、来週の豪ドルは横ばいを予想する。先週、国際通貨基金(IMF)は世界経済見通し(4月)を公表した。豪2018年、2019年の成長見通しはそれぞれ+3.0%、+3.1%とした。2017年(+2.3%)より成長が加速する見込みだが、一方で、オーストラリア連邦政府の債務が世界金融危機以降、他の先進国と比べて急速に増加していることに懸念が示された。IMFは、オーストラリア連邦政府の財政が2020年までに黒字に転換すると予想しているものの、今後も政府債務動向には留意が必要だ。また、今週は24日に豪1~3月消費者物価指数(CPI)が発表される。市場予想では、CPI:+2.0%、基調インフレ:+1.85%となっている。RBAのインフレターゲット(2~3%)をタッチもしくは下回る状況であり、利上げ観測は盛り上がりにくく、今週の豪ドルは年初来安値圏でのもみ合いを予想する。市場予想を下回るCPIが発表され、豪ドルが年初来安値(0.7643)を下回っても、値ごろ感から豪ドルは買い支えられると考えており、下値余地は限定的と見る。一方、上値は200日長期移動平均線0.7816と予想する。来週は5月1日にRBA理事会、2~3日にFOMCが開催される。しかし、豪州、米国共に金融政策維持が予想されており、豪ドルは既存のレンジ(0.76~0.78)を中心とした横ばい推移となろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(4/16~4/20)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7655 高値 0.7813 終値 0.7669

(対円) 安値 82.43 高値 83.95 終値 82.60



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。